



めじかじ
通信

No.193

創業百十五年

茶和園代表

大西量元

かずもと

さん (74歳)

相生町



エイジングと薬膳

花粉症に負けない!



の食品店ばかりか呉服屋荒物屋小間物屋まで訪ねて紙袋入りの茶葉を店頭で置いてもらった。「ある時払いの催促なし」の商法が当たって、茶箱を乗せるのは自転車からオート三輪へ、そして四輪のダットサンへ変わった。「ある時払いの催促なし」について後に父は量元さんに「手形が落ちるか心配で、眠れない日もあった」と話したという。

今「茶和園」を営む量元さんと妻の美智子さんは「店は古くからのお客様に支えられている」と言う。世界的抹茶ブームのため若者が抹茶を求め、備長炭で焙煎したコーヒー豆を注文する客もいるが「いつものお茶」を扱う年配客が多い。茶道具を扱ってきた

ので茶道関係の人も、この店を頼りにしている。「茶和園」も「古くからのお客様」を大切にしていて、求めに応じて遠路でも少量でも配達している。量元さんは体が弱く持病を持ちながらも、勉強の良くて卒業すると周囲の励ましに従って、東京の早稲田大学高等学院に進学した。学院の推薦枠内に入る成績上位者だったので、仲間と一緒に早稲田大学理工学部に進んだ。機械工学に特段の興味はなかったが順調に4年間で卒業の見込みとなって就職活動中に、初めて父が進路について意見を言った。「好きな仕事に就いて構わないが、10年したら退職して家業を継いでほしい」との希望だった。量元さんは初めて自分の意志で、いきなりお茶の修業を始めた。研修先は一代で本支店合わせた年商が当時20億円に迫るほどの茶小売店を築いた人の元に決めた。この人は早くから、今人気の深蒸し茶に注目したことでも知られている。ある時、この伝説の創業者が声をかけてきた「大西君、商いは売ら上げがすべてなのだよ。売ら

元日を除き年中無休を守ってきた店が小諸にある。お茶と海苔やコーヒー豆の小売店「茶和園」だ。本町で米屋を営んでいた曾祖父が明治45年に相生町のこの地で「小諸館」という旅館に転業した。「茶和園」ではこれを創業年としている。戦中戦後は旅客が少なくなり旅館を廃業。職業軍人だった父は慈恵医大に合格したが学資が続かず2年で中退を余儀なくされた。帰郷して祖父と雑貨店を始め、後に売り上げの良かった「お茶」に特化した。人気の茶葉を求めて宿帳を頼りに茶葉を買い付けに行ったという。当時は「小卸し」という売り方が主流で、佐久や軽井沢、上田川西地区



なければ意味がない」当たり前だが腑に落ちる言葉だった。この人の元で茶のすべてを学ぼうと思った。やがて、ある支店の営業担当次長になって猛烈に闘志を燃やした。「一日でも、本店に売り上げで勝ちたかった」が「果たせなかった」。支店で売り上げが多い日は、本店の売り上げも多かった。商売とはこんなもの、と悟った。家業を継いだ時に、大西さんは店の内装を修業した店の作りと同じにした。父の開拓した「小卸し」は少なくなつて、スーパーマーケットに卸し、大型店には出店を計画した。こうして「茶和園」の年商が小売りを主に2億円を超えた頃、佐久税務署から「表敬状」が2回贈られた。これが大西さんの自慢だ。

実は長く続けてきた「年中無休」を最近変更して、客足の途絶える日曜午後のみ店を閉めている。そして、モットーにしてきた「良いものをお客様に」を商売とすることが「茶価」の高騰により難しくなつたため、数年のうちに店を閉じる計画という。「健康でいるうちに、店に余力があるうちに」と大西夫妻は決心した。

花粉症に負けないで。
(国際中医薬膳師 小清水由良)